

新 入 生 へ

新入生の皆さんへ

大学院地域文化研究科長 立石 博高

新入生の皆さん、入学おめでとうございます。高校を卒業されて大学生となられた皆さんは、受験勉強の束縛から解放されて新たなキャンパスライフに夢と希望を抱いていることでしょう。そして学部を終えられて大学院生となった皆さんは、自分の研究課題をどうやって絞り込むかにもう思いをめぐらせていること

でしょう。いずれにしろ若い皆さんたちは、これから自分は何をすべきか、自分はどうあるべきかに思い悩むことになります。

21世紀に入ったいま、華やかなミレニアムの幻想は失われ、既存の諸価値が大きく揺るぐなか、人々はそれぞれのアイデンティティの拠りどころを模索しています。おまけに皆さんは、青年期にあって自我を確立するという課題も背負っているのですから、なおさら不安な状態におかれています。

そんなとき、答えそのものは自分で見つけるしかないわけですが、それを探したすカギは案外、古典作品の中に見出されるかもしれません。

たとえば、ジェイムズ・ジョイスは1904年に著した『若き日の芸術家の肖像』という作品のなかで、主人公ステイ



ーヴンに、民族主義者でアイルランドの自由を唱える友人デイヴィンとの会話の中で、次のように言わせています。「…人間の魂がこの国（アイルランド）に生まれると、とたんに網がいくつも投げられて、その飛翔をさまたげようとする。きみはほくに、国民性とか、国語とか、宗教のことを話してくれるね。ほ

くはそんな網にはかからずに飛んでみたいんだ。」

ここでは、すでに百年前に、「ナショナリズムの克服」が問いかけているのではないのでしょうか。ステイーヴンは「百万回でも現実の経験と出会い、ほくの魂の鍛冶場でいまだ創られざるほくの民族の良心をきたえるために」ダブリンから旅立ちます。「いにしへの父、いにしへの工匠」がその助けとなることを祈りながら…。

社会が大きく変化する時代であるからこそ、皆さんが大学生活を通じて先人の知恵を深く学び取り、21世紀の「知の工匠」となれることを期待してやみません。